

令和8年7月



スクールカウンセラー 中野隆治



あお
「星空を仰ぐ」



みなさんは幼い頃、きらめく星々にちりばめられた夏の夜空を見上げたことはありませんか。その時の自分の気持ちを思い出すことはできるでしょうか。

ここに紹介する詩には、大人の女性から見た夏の星々についての思いがつつられています。

まばゆいばかり

豪華にばらまかれ

ふるほどに

星々

.....

うつくしい者たちよ

わたくしが地上の宝石を欲しがらないのは

すでに

あなた達を^み視てしまったからなのだ

^{いばらぎ}
(茨木のり子『夏の星に』)

夜空の星々を、地上の^{まさ}宝石にも勝る美しい存在と^{とら}捉えています。詩人の星への思いが、同じ思いの共感となって、読者を感動させるのです。

我々は、日頃、つま先ばかり見て生きているのかもしれません。日常のちょっとしたトラブルや、誰がどうしたとかこうしたとか、自分の周囲にばかり^{わずら}気持ちが煩わされ、宇宙の中の一つの星、地球という、無数にあるかのような星達の一つに、奇跡のように立っているのかもしれません。

人は時に、日常から非日常に、生きる場面を舞台転換させる必要があるのではないのでしょうか。単なる息抜きでもかまわないし、癒し^{いや}効果であってもかまわないと思います。日常の自分と真剣に向き合うために、非日常の体験が、きっと効果を表すことになるのではないのでしょうか。

それはプラネタリウムではなく、他の季節でもなく、夏、できればたった一人、自分の立ち位置を確かめられるような場所で、降り注ぐ星々の^あ輝きを浴びてみてはどうでしょうか。長い休みの^{かつりよく}たった一日のそんな経験が、秋からのみなさんの活力につながっていくのではないかと思います。